

説教抄

十 私達の父なる神と主イエス・キリストから恵みと平安とが、皆様お一人お一人の上にありますように。アーメン

今日から教会の暦では新しい年が始まります。「待降節」という日本語は「主の降誕を待つ期節」という意味では分かりやすいのですが、元のラテン語は「到来」を意味します。待降節とは、二千年前に主イエスが世に来られたことを思うだけでなく、世の終わりに栄光のうちに再び来られることを覚える期節でもあるからです。そのことを明確にするために新しい聖書日課では、「目を覚ましていなさい」という福音書の言葉で初めているのです。

本日の旧約・使徒・福音の3つの聖書箇所は、いずれも「時」を表す言葉と勧告が結び付けられています。イザヤ書では、主の神殿の山が高く聳える「終わりの日」の到来が語られ、「ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう」と呼びかけています。ローマ書では、「あなたがたは今がどんな時であるかを知っています。あなたがたが眠りから覚めるべき時が既に来ています」と語り始め、「主イエス・キリストを身にまといなさい」で閉じられています。福音書では「人の子は思いがけない時に来るからである」という言葉に対し、「目を覚ましていなさい。…このことを弁えていなさい。…用意していなさい」という主の言葉が語られるのです。

つまり、「終わりの日」の到来を知っているから、私たちは「主の光の中を歩む」ことが可能になり、「眠りから覚めるべき時」が来ると知っているから、私たちは「主イエス・キリストを身にまとう」ことが出来、「人の子が思いがけない時に来る」ことを知っているから、「目を覚まし、弁え、用意している」ことが出来るということなのです。

では「目を覚ましている」とはどういうことでしょうか？ 実は、今日の箇所には、殆ど何も語られておらず、続く 24:45～25:46 にそれが語られていきます。それは「主人が帰って来たとき、言われたとおりにしている」（24:46）ことであり、「ともし火と一緒に、壺に油を入れて持っている」（25:4）ことであり、「預かったタラントンを用いて、ほかのタラントンをもうける」（25:16-17）ことなのです。つまり、神様から与えられた人生を自分に与えられた賜物を生かしながら誠実に生きるということです。そして 25:31～46 になってようやく「目を覚ましている」ことの意味が明らかにされるのです。

では、そこに何が書いてあるか。最後の審判です。主イエスが語られる審判の場面は、最初に正しい者である羊を右側に、そうではない山羊を左側に分ける場面から始まっています。それから、その理由をそれぞれの者達に向かってお語りになる。そこでは、主イエスのために命を捨てて殉教したとか、全てを捧げて献身したとか、財産を貧しい人に施したとか、自分に罪を犯した者を赦したといったことではないのです。そのような信仰の勇者にだけ出来るようなことではなく、ただ弱く、虐げられ、困窮の中にいる人に、食べさせ、飲ませ、宿をかし、着せ、見舞い、訪ねるといった誰にでも出来ることなのです。ここでは信仰さえも問われていない。ただ小さな愛のわざにあなたは生きたかということだけが問われているのです。



忙しくて心に余裕がないとき、私たちの心から失われてしまっている大切なものは何であるかと考えた時、その一つに「他者の痛みを覚えていること」があると思います。誰かが感じている痛みについて、心を向けることができない。他者の痛みが無感覚になってしま

う、というのが心に余裕がない状態、疲れてしまった時の私たちの率直な姿、眠り込んでいる状態なのかもしれません。

ところで、更に驚くべき事は、審判者であるキリストが、既に、裁きの座に着く者達に一度、生活の中で出会っているということにあります。しかし、そのことを彼らは知りません。彼らの驚きは、彼らの覚えていないような小さくされた者、無名の者への小さな振る舞いを見ておられるところにあるのです。

マタイ福音書の中で「目を覚ましている」とはどういうことか、と言えば、ここにもっとも明快な答えがあります。「助けを必要としている人に手を差し伸べること」「愛を持って生きること」と言ったらよいでしょうか。あるいは、「出会う一人一人の人の中にキリストを見いだすこと」「苦しむ人、虐げられている人を通してキリストに出会うこと」と言うこともできるかもしれません。主イエスは、それほどまでにご自身を低くされ、最も小さき者のひとりとして私達に日毎出会って下さるのです。

主イエスは、この話をご自分の受難の直前で語られました。死の現実を目の前にしながら、死が全ての終わりではなく、その死を超えたところに新たな命が始まることを教えられたのです。ですから、この最後の審判は主イエスがこの言葉を聞く私達に、絶望を与えるために語られたものではありません。あなたに出会うために人となり、既にあなたに出会って下さり、あなたを誰よりも知っておられる方がいる。ご自身の愛の御手をもって、しっかりと抱きしめ守って下さる方がおられる。

そして、そのお方はその為に、飼葉桶に横たわっている赤子の時から、十字架の死に至るまで私達と同じこの人生を歩んで下さったお方なのであります。「この最も小さい者のひとり」、それは他でもない、この私でありあなたなのです。

アドベントが始まりました。クリスマスは既に私たちの許へ幼子として来て下さった主を心に刻み直す期節です。と同時に、再び来られる王なるキリストを覚える時です。教会暦で言えば最初と終わり、アルファでありオメガですが、別々のものでなく重なりあっていると行って良いのです。

聖餐式でよく歌う「マラナ・タ(MARANA・THA)」という言葉は「主よ、来て下さい」という意味ですが、区切りを一文字ずらすと「マラン・アサ(MARAN・ATHA)」、「主は来て下さった」という意味になります。教会の時代を生きている私たちは、まさに既に主が来て下さった時代と主の再臨(終末)を待つ時代の間を生きているのです。この希望のもとに私たちは、主の祈りにある「御国が来ますように」という願いを祈ることが許されているのです。

主イエスは、その生涯を通して私達の弱さ、絶望の深さを知っておられました。そのような最も小さき者への愛に生きられた主が、私達の小さな、小さな業に向かって励ましと希望を語って下さっている。

キリストに再び会う時、それは「この最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」という言葉に生きた多くの愛する者達との再会の時でもあります。

このことは、キリストの福音を知る機会を得ないで、また信仰告白に至らずに地上の生涯を終えて、神のみもとに召された方々の場合も同じであります。主は小さき愛の業に生きた彼らのためにも死なれたのです。ここに私たちの思いを越えた主の救いの御業があります。

十 望みの神が、信仰から来るあらゆる喜びと平安とをあなたがたに満らし、
聖霊の力によって、あなたがたを望みにあふれさせて下さるように。アーメン